

停電

ティアナは、なんだか嫌なものを感じていた。

それが何かはつきりとは言えないだが、一つ言えるとなれば漠然とした予感めいた胸騒ぎだった。

「ティアお姉ちゃん？ どうしたの？」

きつと顔に不安の色が滲み出ていたのだろう。

それが伝染したかのようにヴィヴィオが心配そうな顔をして、ティアナの座っているベッドの隣へとすり寄ってきた。

「あ、ううん。何でもないよ。ヴィヴィオごめんね」

ティアナは自分の不安を打ち消すようにしてヴィヴィオの肩を抱く。

フェイトとシャマルの二人が、機動六課へ連絡をとると言って病室を出てから、しばらくのあいだ二人でヴィヴィオが持っていたカードゲームをして遊んでいた。

今はそのカードゲームもすっかり終え、すり寄ってきたヴィヴィオと並んで病室のベッドに腰掛けている。

いつの間にか陽はとっぷりと暮れ、窓からはクラナガンの夜景がキラキラしたイルミ

ネーションのようにティアナの眼下に広がっていた。

「ティアお姉ちゃん。寂しいの？」

ヴィヴィオは、ティアナの手を握りまっすぐこちらを見つめた。それはまるでなのはさに見つめられているようだ。ティアナは思った。

「ううん。だいじょうぶ」

「寂しいときとか、悲しいことがあつたら歌を歌うと元気になれるんだよ。そう、なのはママが言ってたの」

「ありがとう。ヴィヴィオ」

ティアナは小さいヴィヴィオの手をギュッと握りかえすと、こう続けた。

「実を言うと、今朝。あたし、事故に遭つたの。それからなんだか妙に悲しいんだ」

「めかりる ういーしゅ♪ ころんだり迷つたりするけれど♪」

ヴィヴィオは、舌つ足らずながら一生懸命になつて歌つた。ティアナはこんなにも小さい子が、落ち込んでいる自分のために何かしてくれることが嬉しかった。

だから、普段なら恥ずかしくて自分から進んで歌わない唄もヴィヴィオと一緒に口ずさんだ。

歌を一曲歌い終わる頃には、ティアナの心も落ち着いていた。スバルの顔を思い浮かべながら心を込めて歌つた。

「この歌はね、なのはママが教えてくれたの」

「とても良い曲だね。歌いながら友達のこと思い出しちゃった」

「ティアお姉ちゃんのお友達？」

「うん。いっつもあたしにまとわりついてきてね。たまにウザったいになって思うんだけど、でもあたしにとっては、とっても大切な昔からの親友なんだ」

「友達は大切だって。なのはママもいってたよ」

「うん。そうだね」

突然、ティアナが言い終わるか終らないかのところで病室のドアが開いた。

ティアナがドアの方を振り返ればフェイトとシャマルの二人が戻ってきた。

少し前に二人は機動六課のロンググーチと連絡をとって出て行ったきりだった。シャマルの後に続いて今朝の事故で5歳の体になってしまったちっちゃいフェイトが続く。

二人の顔はこの部屋を出て行く前よりもどんよりと曇っていた。

特にフェイトの顔色はその年とは思えないぐらい愁いに満ちた表情をしている。

ティアナは二人の顔色からなんとなく何か良くないことがあったのだと悟った。

もしかしてロンググーチから何か良くないこと知らせでもあったのだろうか、ティアナがそう思っていると、戻ってきたフェイトと目が合った。

今にも泣き出しそうなフェイトに、シャルが声をかけると肩をポンと叩いた。

「フェイトちゃん……」

ティアナは、これからフェイトが何か良くない状況を自分に説明するのだと思い、さつと心の中で身構えた。

この1年、これまで何度かこういった良くない状況を経験してきているティアナは、慣れっこまでとはいかないが、打たれ強くなった方ではあるなど自分自身思っていた。

「さあ、ヴィヴィオ、今度は私と遊ぼうっか？」

シャルは状況がある程度見えているのかヴィヴィオのお守りをかかってでた。

呼ばれたヴィヴィオは、ティアナの方を見て少しだけ悲しげな表情をうかべてから、今度は何事も無かったように頷いた。

「うん」

ヴィヴィオは座っていたベッドを降り、とてとてとシャルの方へ向かって歩くと、シャルのスカートを持って足にギョツと抱きついた。そしてそのままベッドの前へと二人で引き返すと、シャルに抱っこされて、ベッドに座らせてもらっていた。

ティアナもまた、フェイトから何があったか聞くために座っていたベッドを降り、フェイトがいる部屋の真ん中の方へと歩く。

何となくフェイト達の様子から、ヴィヴィオに話を聞かれたくないのだろうと判断した

ティアナは、とりあえず念話でフェイトに切り出してみた。

『フェイトさん…何かあったんですか?』

『なのはが…』

フェイトはとても動揺しているようだった。

なのはさんと何かあったのだろうか…。

ふとさっきの嫌な予感がティアナの脳裏を横切る。

それでも嫌な予感とは裏腹に、なのはさんのことで狼狽^{うろた}えるフェイトさんを見ていると、ティアナは何か二人のために力になりたいと思った。

そもそも、フェイトさんは自分を守るために身をていして化学薬品から守ってくれただ。その結果、本当は自分よりも年上のはずだったのに、今では自分よりも子供になつてしまったのだ。

自分にとつては子供になるなんて本当にまっぴらだったが、もしかしたらフェイトさんの方が自分なんかよりも、ずっと子供の姿が嫌なんじゃないだろうか…。

ティアナはそう考えた。

そう思った途端、ティアナはなんだかとてもいたたまれなくなり自然とフェイトの手を取ってギユツと握っていた。

「ティアナ」